

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月14日現在

機関番号：31302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21720250

研究課題名（和文） 戦後変動期におけるモンゴル人の政治・言論活動に関する研究

研究課題名（英文） Research on the political movement of Mongols  
in aftermath of WWII.

研究代表者

中村 陽子(田淵 陽子) (NAKAMURA YOKO)

東北学院大学・アジア流域文化研究所・客員研究員

研究者番号：40436176

研究成果の概要（和文）：

ホルチン右翼前旗は、日本の帝国主義政策や内モンゴル地域における鉄道網の拡大といった要因と密接に関わりながら近代的な都市化が進められ、戦後変動期の内モンゴルにおけるナショナリズムの拠点地となった。一方で、フルンボイル地域では、独自のアイデンティティに基づくナショナリズム運動が展開された。その歴史的背景として、清朝時代の八旗制システムが温存されていたこと等が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：

Horqin Right Front Banner became the base of the nationalism campaign of Inner Mongolia in aftermath of WWII. This area developed as a modern developed city to be related to Japanese imperialism and railway network. On the other hand, Mongolian inhabitants in Hulunbuir developed a nationalism campaign based on unique identity in aftermath of WWII. There were some historical factors, the Eight Banner system in Hulunbuir and so on.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	0	0	0
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：モンゴル、ナショナリズム、満洲国、呼倫貝爾（フルンブイル、ホロンバイル）

## 1. 研究開始当初の背景

20世紀初頭のモンゴル地域では、内・外モンゴルの政治的分断状態が続いており、第二次世界大戦の終戦前夜に、中ソ友好同盟条約

(1945年8月14日)が締結された結果、外モンゴル(モンゴル人民共和国)の法的独立がはじめて確定するに至った。一方で、外モンゴルから外れた地域、すなわち、「満洲国」

や「蒙疆政権」に組み込まれていたモンゴル人居住地域では、モンゴル人政治家・軍人・知識人が、様々な活動を通じて地域統合のあり方を模索することになる。最終的にこれらの地域は、1947年の内蒙古自治政府の成立、1949年中華人民共和国の成立を経て、中国共産党のもとで一つの「内モンゴル」として統合されるに至った。

かかる戦後変動期（1945-1949年）において、モンゴル人自らがいかなる地域統合を模索し、いかなるナショナリズム運動を展開したか、東アジアにおける前近代と近代の連続性や冷戦構造への転換を考察するうえで、また、大国中心の歴史像を相対化する上でも重要な問題と考える。

しかしながら、従来は資料的制約などからモンゴル人の言説や具体的な政治活動は殆ど明らかにされていない。またモンゴル各地で起きたナショナリズム運動の差異、それぞれの地域で内在化していた意識構造の差異まで踏み込んだ研究は少ないと言える。

## 2. 研究の目的

以上の問題関心から、本研究では、戦後変動期に活動したモンゴル人を対象に、第一に、文献史料や口述資料を収集・分析することで、彼らの果たした歴史的役割を実証的に明らかにする。特に、モンゴル人知識人のオーラル・ヒストリーを研究の一環に組み込み、高齢のインフォーマントから聞き取った口述史料を学会で共有化することを目指す。

第二に、異なる地域のモンゴル人知識人・政治家の言説を分析し、それぞれの地域で内在化していた地域固有のアイデンティティおよびその重層性を明らかにし、当該期のナショナリズム運動の淵源や特質を明らかにする。

## 3. 研究の方法

モンゴル国立歴史中央アルヒーフ、モンゴル国立図書館、国立台湾大学、台湾・国史館、中国国家図書、日本国会図書館などにおける史料調査を継続的に行い、1940年代に内モンゴル各地やウランバートルで出版発行された新聞・雑誌のほか、戦後の日本・中国・モンゴル国で出版された手記・回想録などを収集した。また文献調査の他に、フルンボイル地域出身者からの聞き取り調査を継続的に行う。

文献史料と口述史料を相互に補完することで、モンゴル人知識人の視点に立った歴史分析を試みる。

## 4. 研究成果

①20世紀のフルンボイル地域（現在の中国内蒙古自治区呼倫貝爾市西南部）において近代的なモンゴル民族意識がどのように形成

されたのかを明らかにした。1945年秋にハルハ（外モンゴル）へ集団移住を決定したモンゴル・シンバルガ族の基層社会における、民族アイデンティティの重層性と、八旗制や「アイマク」（遊牧基層社会の結合組織）を基盤とした地域統合の模索過程を明らかにした。すなわち、清朝の帝国支配構造（エスニックグループの移住と八旗への編成）、それと併存する遊牧社会の凝集力（「アイマク」）、地域社会で共有された過去の歴史記憶（マンライ・バートル・ダムディンスレンの活躍）などは、フルンボイル地域社会に内在化されたアイデンティティとして蓄積された。

注目すべき点は、清朝雍正年間にエスニックグループの強制的な移住が実施され、彼等が八旗制という外在的な枠組みへ再編された点である。すなわちフルンボイル地域の場合は、外藩とは異なり、王公という地域統合の核が廃止され、支配者の強制によって社会内部が再編されたことを意味する。20世紀を通じて、清朝統治の枠組みそのものがフルンボイル八旗アイデンティティとして内在化してゆくことになった。それが、他の内モンゴル地域社会とは異なる独自のアイデンティティと凝集性を保持する背景となり、第二次世界大戦後の社会変動に大きな影響を及ぼした。

1945年12月にエルヘムバット（額爾欽巴図、1882-1951、呼倫貝爾自治省長）が執筆した『巴爾虎部簡史』は、国際社会の変動期に、フルンボイルでいかなる政権を樹立するのかという問いかけのなかで執筆されたと推測できるもので、当時のフルンボイル地域上層部のアイデンティティが反映されている。要約すれば、本書の内容は二つのアイデンティティから構成されており、それはフルンボイルにおけるナショナリズムを理解する視座となると思われる。つまり、ハルハからの移住者集団としてのバルガ・アイデンティティと、多様なエスニックグループを包括する領域空間としてのフルンボイル八旗アイデンティティである。エルヘムバットの歴史観によれば、フルンボイル八旗は、離散バルガ族の正統性意識を保持するとともに、強固な地域アイデンティティの核となっていたことがわかる。

②フルンボイル地域出身者のインフォーマントが所有していた古文書について、史料紹介を執筆した。1945年9月から10月頃にかけて、フルンボイル地域において作成された「シンバルガ（新巴爾虎）左翼総管衙門文書」と題されるものである。これは、第二次世界大戦の終結という転換期、フルンボイル自治省政府の成立前夜に作成された、地域の行政末端組織に関する史料である。フルンボイル自治省政府は、ソ連軍及びモンゴル人民共和

国軍の支援をうけて 10 月 1 日付で満洲国興安北省の領域を引き継ぎハイラル（海拉爾）で成立した政権であるが、満洲事変（九一八事変）以前まで施行されていた同地域における自治の回復を目指し、政権発足直後から中国共産党や国民政府との交渉に着手した。省政府首席には、満洲国時代の興安北省長エルヘムバット（額爾欽巴図）が就任した。

本文書は、まさにこの頃、シンバルガ左翼旗のアムガラ（阿木古郎）という行政の中心地において地域住民代表が決定・作成した、地域の行政末端組織・官吏名簿である。その特徴として挙げられるのは、地域の行政末端組織として、清朝の八旗制に由来する編成と官職を復活させている点にある。1932 年に成立した満洲国のもとでフルンボイル地域は「興安北省」と定められるが、シンバルガについては、清朝時代から続く「新巴爾虎左翼旗」「新巴爾虎右翼旗」の基本的な官制は引き継がれ、満洲国時代を経てもなお、佐領体制というべきものが機能していた可能性が明らかになった。

③ホルチン（科爾沁）右翼前旗（通称札薩克図旗）からみた 20 世紀内モンゴルの近代化過程とその特質を明らかにした。当該旗は、清代ジリム盟の中部、大興安嶺南麓索岳爾濟山の南に位置し、西北部には山岳地帯、東南部は大興安嶺を主流とする河川が横断する平原地帯広がる地域である。民国初期の王爺廟は、百戸程度の小さな集落であった。しかし、満洲国建国以降、モンゴル特殊行政区としての興安総署の設置、帝政ロシア時代から引き継がれた鉄道網の発達、日本の対ソ軍事戦略等、ノモンハン・ハルハ河戦争の勃発等を経て、1930 年代半ばより東部内モンゴルにおける軍事、政治、文化、教育の中心地と定められ、モンゴル人の中等教育機関や各種学校、成吉思汗廟の建設などが進められ、内モンゴル各地から様々な人材が集う場所となった。おそらく東部内モンゴル地域ではじめて近代的意味をもつ都市化が進められた地域であると言える。

満洲国崩壊後もホルチン右翼前旗は、モンゴル・ナショナリズム、政治勢力のヘゲモニー争い、内モンゴル革命史上における人的ネットワーク、マスメディア、軍事、政治、教育の中心として、歴史的変革の舞台となった。1947 年 5 月 1 日、中国共産党は王爺廟にて内モンゴル自治政府の成立を宣言し、政庁所在地となった同市は 11 月 28 日、モンゴル語で「赤い都市」を意味する「ウランホト（烏蘭浩特）市」と改称された。

20 世紀内モンゴル史のなかのホルチン右翼前旗は、その地理的条件と地政学的価値などが絡み合い、モンゴル民族運動史、移民史、植民地史、教育史、都市史、経済史、軍事史

などが交錯する特徴を持っていたといえる。戦後のドラスティックな政治変動期においては、ソ連・モンゴル軍、中共といった政治勢力の戦略拠点となるとともに、中華人民共和国成立前夜における内モンゴル政治の重要な拠点となった。ホルチン右翼前旗を拠点として構築されたモンゴル人ネットワークは、当時の内モンゴル政治に大きな影響を及ぼしていたことがわかる。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①田淵陽子「モンゴルにおける民族と地域統合の模索—20 世紀前半期のフルンボイルを例に」『第六屆現代中国社会変動與東亜新格局国際学術討論会会議手冊&論文集』第 2 巻、2012 年、401-420 頁、査読無。

②田淵陽子「満洲国興安学院について」（モンゴル語）『モンゴル史研究と史料』Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, CNEAS Report. 2, 2011, pp. 286-290, 査読無。

〔学会発表〕（計 4 件）

①田淵陽子「モンゴルにおける民族と地域統合の模索—20 世紀前半期のフルンボイルを例に」第六屆現代中国社会変動與東亜新格局国際学術討論会会議、2012 年 8 月 21-22 日、於中華民国・花蓮市：東華大学。

②田淵陽子「20 世紀モンゴル史における Kh. チョイバルサンの評価をめぐって」東北大学東北アジア研究センター共同研究「北アジアにおける帝国統治の遺産に関する研究」研究会、2012 年 3 月 21 日、於東北大学東北アジア研究センター。

③田淵陽子「20 世紀内モンゴル史のなかのホルチン右翼前旗」東北大学東北アジア研究センター共同研究「北アジアにおける帝国統治の遺産に関する研究」研究会、2010 年 7 月 3 日、於東北大学川内北キャンパス。

④田淵陽子「満洲国王爺廟におけるモンゴル人学校」（モンゴル語）国際学術シンポジウム「モンゴル史研究と史料」、2009 年 9 月 20 日、於モンゴル国ウランバートル市：モンゴル国立大学。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 陽子(田淵 陽子) (NAKAMURA YOKO)  
東北学院大学・アジア流域文化研究所・  
客員研究員  
研究者番号：40436176